

# 強者の戦略

こんにちは、日本史の岡上です。夏の終わりに台風が甚大な被害をもたらしました。今年は無曾有の出来事が次々に起こり、心を痛めることが続きます。自然の脅威に対しては為す術もありませんが、こんな時こそ思いやりの心を大切に、協調しながら困難に打ち勝っていききたいものですね。何よりこの解答を読んでくれている皆さんは、明日を担う世代として志高く、目の前にある目標のため努力を続けて欲しいと願って止みません。

さて、1週間が経ちました。解答は仕上がりましたか？

今回取り上げた東大日本史の第3問は近世からの出題で「城普請（役）」をテーマにした問題でした。

「城普請（役）」については、おそらく普段の学習ではあまり注目しない事項かもしれませんが、解答作成に戸惑った人も多かったのではないのでしょうか。

しかし、今回は資料文と問題文が丁寧に（ある意味、非常に意図的に）誘導してくれていますので、いつも以上に**“問題文・資料に忠実に、注意深く分析する”**の東大日本史の鉄則に従えば、自ずと答えに辿り着けたのではないのでしょうか。

では早速、問題文・資料を読み進めながら、解答に迫っていきましょう。

## <江戸時代初期の城普請（役）とその影響>

### （1）「城普請役」からみる幕藩体制の形成

#### 設問A

幕府が藩に課した城普請役は、将軍と大名の関係、および大名と家臣の関係に結果としてどのような影響を与えたか。負担の基準にもふれながら、3行以内で述べなさい。

設問Aで問われているのは、「城普請役」が「将軍と大名の関係」、そして「大名と家臣の関係」に与えた影響です。

まず、教科書や用語集では「城普請役」についてどんな説明がされているのか確認してみましょう。

大名は石高に応じて一定数の兵馬を常備し、戦時には将軍の命令で出陣し、平時には江戸城などの修築や河川の工事などを負担した。

（『詳説日本史B』山川出版社）

お手伝い・・・幕府が諸大名に課した土木事業の普請役。城郭・河川工事などのお手伝い普請で、大名の財政難の一因となった。

（『日本史B用語集』山川出版社）

以上のように、教科書や用語集では大名が「城普請役」を負担したという事実や、それが大名の財政難の一因となったといった影響に関しては説明しているものの、設問Aの要求を満たすような言及はありません。そこで、次は資料文の分析に移っていきましょう。

17世紀前半、江戸幕府は各藩に、江戸城や大坂城等の普請を命じた。

問題の冒頭ですが、ここで注目しなければならないのは「17世紀前半」という時代設定ですね。17世紀前半といえば、

1603年 江戸幕府の成立

1615年 大坂の役・元和偃武

などから戦国時代が終結し、江戸幕藩体制の形成期であったことが分かります。つまり、幕藩体制形成期に江戸幕府が各藩に「城普請役」を命じたのは、**戦時においては軍事（兵馬の準備や出陣）を通じて**

# 強者の戦略

将軍と大名の主従関係を形成していたものを、平時において「城普請役」などの諸負担に置き換え、さらに将軍と大名の主従関係を形成・安定させようとしていたのだと考えることができます。

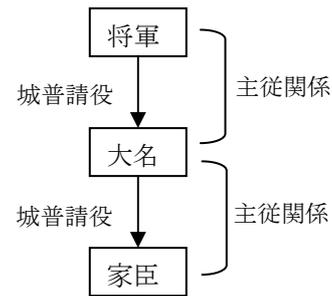
このように「将軍と大名の関係」については比較的容易に答えることができますが、問題は「大名と家臣の関係」ですね。これについては、さらに資料文を分析していきましょう。

(1) 城普請においては、それぞれの藩に、石垣や堀の普請が割り当てられた。その担当する面積は、各藩の領知高をもとにして決められた。

(2) 相次ぐ城普請は重い負担となったが、大名は、城普請役をつとめることが藩の存続にとって不可欠であることを強調して家臣を普請に動員し、その知行高に応じて普請の費用を徴収した。

資料文(1)にはそれぞれの藩が担当する城普請の面積が「各藩の領知高をもとにして決められた」とあります。さらに資料文(2)には「家臣を普請に動員し、その知行高に応じて普請の費用を徴収した」とあり、大名に課された「城普請役」が家臣に分担されていることが分かります。ちなみに問題文の条件でもある「負担の基準」に関しては資料文(1)「各藩の領知高をもとにして」、資料文(2)「その知行高に応じて」とあることから、**負担の基準は石高である**とまとめることができます。

さて話を「大名と家臣の関係」に戻しましょう。「将軍と大名の関係」においては「城普請役」を通じて主従関係が形成されていきました。ということは、大名と家臣の間でも「城普請役」が同様の形式で分担されていった事情を考えると、**大名と家臣の関係**においても「城普請役」を通じて主従関係が形成されていったと考えられますね。



しかし、ここで気になるのは「大名は城普請役をつとめることが藩の存続にとって不可欠であることを強調して家臣を普請に動員し」という表現です。東大の（東大に限らずとも）問題文・資料文には必ず意味・意図がありますから無視するわけにはいきません。

大名にとって幕府から課された「城普請役」などの負担をつとめることは、将軍との主従関係を構築していく上で非常に重要な要素であったということは間違いありません。特に外様大名など将軍との関係性が比較的希薄な大名にとっては、「城普請役」をつとめることで江戸幕府に対する服従を示し、安定した地位を確保する意味があったと考えることができます。

しかし、ここでは「藩の存続にとって不可欠」とあります。では「藩」とは何でしょう。ここでの「藩」は**大名だけでなくその家臣を含めた「大名家全体」と捉える**べきでしょう。大名とその家臣が一致団結して江戸幕府への「城普請役」をつとめる。その過程の中で、**大名と家臣が藩(大名家)としての意識、つまり協調して藩(大名家)を盛り立てていく意識が醸成されていった**ということも指摘しておきましょう。

以上をまとめて、解答を作成します。

# 強者の戦略

## 【解答例】設問A

城普請役は戦時における軍役と同様に石高を基準として課された。その結果、将軍と大名、大名と家臣の主従関係が形成され、大名・家臣間には藩としての意識が醸成され、幕藩体制の確立を促した。(90字)

## (2)「城普請」からみる経済発展

### 設問B

城普請は、17世紀の全国的な経済発展に、どのような効果をもたらしたか。2行以内で述べなさい。

設問Bで問われているのは、「城普請」が17世紀の全国的な経済発展にもたらした効果です。設問Aでは「城普請役」が幕藩体制の形成に影響を与えたという政治的・社会的な側面をみてきましたが、今度は経済的な側面を問われています。これも普段の知識では解答できませんので、資料文の分析を進めていきましょう。

(3) 城普請の中心は石垣普請であった。巨大な石が遠隔地で切り出され、陸上と水上を運搬され、綿密な計算に基づいて積み上げられた。これには、石積みの専門家あの上穴太衆に加え、多様な技術を持つ人々が動員された。

(4) 城普請に参加したある藩の家臣が、山から切り出した巨石を、川の流れをたくみに調節しながら浜辺まで運んだ。これを見て、他藩の者たちも、皆この技術を取り入れた。この家臣は、藩内各所の治水等にも成果をあげていた。

資料文(3)には巨大な石が、

①遠隔地で切り出され

②陸上と水上を運搬され

③緻密な計算に基づいて積み上げられた

とあり、またそのために「多様な技術を持つ人々が動員された」とあります。

また資料文(4)には、ある藩の家臣が、

④巨石を、川の流れをたくみに調節しながら浜辺まで運んだ

⑤藩内各所の治水等にも成果をあげていた

とあり、また、「他藩の者たちも、皆この技術を取り入れた」という記述もみられます。

**17世紀の経済発展といえば全国的な農業・商業・流通などの発展がみられた時期**であるという意識があれば、①～⑤をそれらに関連づけてまとめていけば解答に近づけるのではないのでしょうか。

まず①の採石の技術は、掘削に関するものですので、江戸初期から盛んに行われた新田開発、灌漑施設の開削に転用されたと考えられます。次に②はそのまま陸上・水上における流通網の形成を促したと考えられるでしょう。③の石積はどうでしょうか。関西在住の方であれば近くに大坂城がありますので実際に見ることができますが、石積は非常に精巧なもので、それには高度な測量技術が利用されていたことがわかります。その測量技術はあらゆる土木事業に転用されたことでしょう。



④・⑤からは川の流れをたくみに調節する技術が、そのまま治水の技術として利用され、その技術は他藩へと伝播していったことがわかります。

以上より、「城普請」が17世紀の全国的な経済発展にもたらした効果としては、

◇陸上・水上における全国的な流通網の形成を促した

◇灌漑施設の開削の技術、土木技術、治水技術などが進歩し、全国的な新田開発による耕地面積の拡大をもたらした

# 強者の戦略

とまとめることができます。

なお、陸上・水上における全国的な流通網の形成については江戸・大坂を中心に展開され（問題の冒頭「江戸城や大坂城等の普請」と対応させてもいかもかもしれません）、商業発展の基盤となったことは言うまでもないでしょう

## 【解答例】設問 B

江戸・大坂を中心とした水陸流通網の形成が促され、各藩に伝播した土木・治水技術は新田開発による耕地面積の拡大をもたらした。(60字)

いかがだったでしょうか。「城普請（役）」という事象を通して、それが与えた政治的・社会的・経済的影響を問う本問は、「院内銀山」をテーマにした昨年 2010 年度の第 3 問と類似する部分があったといえるかもしれません。つまり、戦国時代から江戸時代への過渡期における様々な変化が、それぞれに関係性をもっていたという視点は、東大の近世の出題におけるひとつの形式と言えるかもしれませんね。

普段の学習では分野別という名目のもとバラバラに理解しがちな事象を、このような問題を通じて有機的に結びつけて考えることができたとき、歴史を立体的に捉えることができたという感覚を得られるのではないのでしょうか。

さて、いつものように論述問題の解答はもちろん一つではありません。「これはどうだろうか?」「これではだめなのか?」と自分では判断がつかないものは必ず、添削してもらうことをお勧めします。この『強者の戦略ホームページ』でもメールにて質問などを受け付けていますので、どしどし送ってきてくださいね。

それでは次回「東大日本史のみかた」をお楽しみに!!